

【概 要】

現代社会では、家庭生活の多様化が進んでいる。その中で、生活の営みに係る知識及び技能を習得させるとともに、各家庭において生活の課題を見つけ、見方・考え方の理解を踏まえ、適切に選択・評価し、改善をする、「課題と実践」を日常的に繰り返すことで、豊かな生活を構築していく資質・能力を育成することが重要視される。そこで、生徒が知りたい情報を自由に学ぶことができる環境を整えた上で生徒のつまづきを想定し、それに対する手立てを打ったり、家庭科の様々な分野の授業で見方・考え方を働かせて思考させることを繰り返したりすることで、「課題と実践」の充実を図れると考えた。こうした「課題と実践」に係る営みにより、生徒の主体性を高め、家庭科の学びを日常生活で取り入れることができるはずである。以上のことを立証するために、①「生徒が『課題と実践』に主体的に取り組むための教材準備と学習支援の工夫」、②「『課題と実践』を通して課題解決能力の質を高めるための指導の工夫」の2点を意識して研究・実践を行った。

1 主題設定の理由

現代は、家庭形態の変化や家庭機能の外部化など家庭生活の多様化が進み、家庭によって最善の暮らし方は異なっている。このような社会で豊かな生活を送るために、子どもたちには、「どうしたら生活が良くなるのか。」「何を重要視して生活を見直していくか。」と問い続け、習得した知識及び技能を駆使して問題の解決に取り組み、家庭に合った最善の暮らし方を生み出していく力が求められている。そのためにも、まず、基本的な生活の営みに係る知識・技能の習得を進めつつ、主体的に家庭での生活を見直し、家庭や状況に合った見方・考え方をを用いて課題解決（以下「課題と実践」）していく資質・能力を育成することが必要である。本校では、「課題と実践」を家庭学習で自由課題として行って3年目を迎える。より質の高い、意味のある実践する力を付けるため、指導や提示方法の改良を重ねてきた。

2 生徒の実態

本校の全校生徒に対して、アンケートを実施した結果は、下記のとおりである。

【質問①】生活で困り感を見つけ、課題を解決する力は豊かな生活を営む上で必要な力だと思うか

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば必要ない	必要でない
65.8%	31.3%	2.3%	0.6%

【質問②】生活で困り感を見つけ、課題を解決しているか

いる	どちらかといえばいる	どちらかといえばいない	いない
18.1%	45.5%	29.4%	7.1%

【質問①】の結果より、日常生活で課題解決の資質・能力を習得する必要があると考える生徒の割合が97.1%と高いことが分かる。特に食・衣生活においては、成長期を迎え、激しく変化する時期となる。例えば、制服を長い間着て過ごすようになり、高学年になると修繕が必要になることもある。また、中学校家庭科の初回授業では、「自立」について学習する。自分で生活を豊かにしたいと願う気持ちは多くの生徒がもっていると考えられる。

【質問②】の結果より、日常生活で課題解決をしている生徒は63.6%ほどであった。【質問①】と比較して考察すると、課題解決をしていく力を付ける必要性を多くの生徒が感じているが、実際に力を身に付け、活用しながら実践することはできていない現状があることが分かる。

したがって、これからの生活を豊かに営むためには、基礎的な家庭科の知識・技能を習得するだけでなく、自身の現状を把握し、課題解決に向けて計画、実践、分析をする力を着実に身に付けなければならない。そのため、家庭科の学びを用いて家庭生活を見直すことや、「課題と実践」を授業内でも実施し、見方・考え方を働かせて問題解決をできるよう、提示や授業実践を工夫することが必要であると考えた。

このような生徒の実態をふまえ、研究主題を以下のように設定した。

「課題と実践」を通じて
資質・能力を向上させる指導の在り方
～生徒が主体的に課題解決していくための
教材準備と提示の工夫～

3 研究仮説

「課題と実践」を行うための手立てや知りたい情報を共有し、つまずきに対する支援を充実させることで生徒の興味や関心を高めることができれば、主体的に日常生活の中で実践をすることができる。

家庭科の見方・考え方を分かりやすく提示したり、題材終盤に「課題と実践」の授業を行ったりすることで、繰り返し思考することができ、多角的に見方・考え方をを用いて質の高い課題解決能力を身に付けることができる。

4 研究内容

【研究内容1】

生徒が「課題と実践」に主体的に取り組むための教材準備と学習支援の工夫

- (1) 活動を円滑にするための手立ての工夫
- (2) つまずきに対する支援の工夫

【研究内容2】

「課題と実践」を通して課題解決能力の質を高めるための指導の工夫

- (1) 家庭科の見方・考え方で思考するための提示や指導の工夫
- (2) 題材終盤で「課題と実践」を取り入れた授業の実施

5 研究実践

【研究内容1】

生徒が「課題と実践」に主体的に取り組むための教材準備と学習支援の工夫

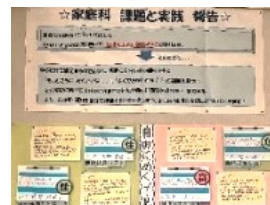
- (1) 活動を円滑にするための手立ての工夫

生徒にとって初めての内容に取り組む時、自由かつ取り組みやすい情報や仕組みを提示することで、生徒の興味・関心を引き出し、意欲的に「課題と実践」に取り組めると考える。

○「課題と実践」の過程の共有

「課題と実践」の過程を、「現状」、「課題」、「計

画」、「実践」、「結果」、「評価・反省・今後」と設定し、「オクリンク」でシートをつなげた。「カードBOX」に教科ファイルを作成することで、全校生徒が自由に何度でも取り組めるようにした。手本として教師の「課題と実践」の実践例も保存し、初回の授業で生徒に紹介した。生徒が提出した実践は教師が評価し、良い点やさらに改善できる点を書き出し、学校の掲示板にて展示を行った。【写真1】



【写真1:「課題と実践」の掲示の様子】
展示場は、全校生徒が定期的に通る被服室や給食室の近くに設けた。また、教師が生徒の実践分野にて、補足説明や理論をまとめ、横に掲示することで、根拠を理解し、再実践をする生徒や新たにきっかけとなって実践する生徒がみられた。

○自由に学べる教材準備とその共有

家庭科の知識・技能は学習する学年に関わらず、学び使うことができると考え、全校生徒が自由に学びを得られるように、「オクリンク」にて全学年で共有を行った。各分野で資料を作成し、新しい資料を共有した際には授業で紹介をした。教師が製作、調理したものや街で見つけたマークとその意味などを実物や写真で見せたり、生徒の「課題と実践」や全校の自発的な活動の報告を紹介したりすることで、複数の学年の生徒から質問をされたことが、この共有教材を作成するきっかけとなっている。生徒には、気になることや実践したことがあれば、教師に報告するように日々伝えており、共有する資料の内容を精査している。

第2学年「ファイルカバー製作」(R3～)では、作業が進んでいる生徒は、オリジナルの作品になるように刺しゅうを行った。刺しゅうに必要な「刺しゅう枠」、「刺しゅう糸」、「ステッチ(縫い方)」の方法を各シートにまとめ共有し、主な6つのステッチの拡大教材を製作し、黒板に掲示した。【図1】



【図1: 全校生徒が自由に見て学べる共有ファイル(刺しゅうの例)】

導入で、同じ図案を単色で波縫い（ランニングステッチ）したものと図案に合った配色や縫い方をしたものを比較して提示し、縫い方は自由に選択できることを伝えた。

生徒は自分の力量を判断し、波縫いで名前やマークを入れて取り組む生徒や、細かな図案を複数のステッチを用いて製作する生徒がみられた。刺しゅうの作業は、その時間の作業内容を終了した残り時間で行うため、回数を重ねるごとに多くの生徒が意欲的に作業をし、刺しゅうの時間を確保できるようにしていた。また、製作終了後、長期休みなどを利用して、家庭で主体的に製作を続ける生徒も多くみられた。「課題と実践」につなげて、家庭の衣類を修繕し、ワンポイントとして刺しゅうを入れる生徒も複数おり、学習と家庭生活をつなげることができた。

このように個人で進度差が生じやすい実習等で追加の作業を自由に取り組めるよう設定しておくことで、生徒の主体性を育むことができ、教師は学習内容に不安のある生徒に注力して指導することができたため、有効であったと考える。

【研究内容 1】

生徒が「課題と実践」に主体的に取り組むための教材準備と学習支援の工夫

（2）つまずきに対する支援の工夫

○アンケート、振り返りシートによる支援

第3学年「発達を促すおもちゃ製作の改良」（R5）では、事前アンケートを行い、次の質問をした。

- ・製作で困っている時に参考になりたい方法
- ・製作に不安を感じているか
- ・要望や意見

アンケートの結果、本や実物のおもちゃを参考にしたいという回答が多かったため、実物のおもちゃを用意し、各おもちゃから発達を促す工夫を6つの発達ごとに教師が分析し、「ヒントカード」を作成した。カードを参考にするのかは生徒が判断する。また、前々時に年齢に合った発達の目安を「ムーブノート」にまとめ、学年で集計したものを、冊子にして資料として提示した。前時では、振り返りシートを用いて、「製作にあたって、困っていること、相談したいこと」を記入させた。

教師は、アンケートと前時の振り返りから、クラス全員に対しての改良へのアドバイスや支援を考え、製作に不安があると回答した生徒や、手立てが必要

と感じた生徒を中心に机間指導を行った。【表1】

【表1：改良のアドバイスと手立ての一例】

製作物	○製作において、要望や意見（事前アンケート） ○前時の振り返りの生徒の困り感に対しての教師のアドバイス ○教師からみた改良点と手立て
的入れ	○楽しいのでこういう時間を増やしてほしい。 ○難易度が高い→投げる距離の設定（年齢、個別設定） 穴とボールの大きさの変更 ○ボールが当たると痛い→フェルトで包んで 中をティッシュに（土屋先生のおもちゃを参考にさせる） ○発達が少ない →点数を決めて合計点（認知） ボール（色変えて（認知））と穴の大きさで点数変える
恐竜人形	○認知や情緒を働かせるとおきのおもちゃを作りたいし、仲間の良さも見つけて取り入れたいです。 ○5歳（運動機能）キャッチさせるゲーム性を持たせる（認知）点数を付ける ○安全面 角を丸く切るorフェルト貼る（板書をチェックさせる）

複数の手立てや学び方を選択させることで、何をしたらよいか分からず困ってしまう生徒を生み出さず、誰もが主体的に検討することができた。【図2】

課題設定	いろんな遊び方ができて飽きずに工夫できるようにしよう。
方法の検討	困り感 → 解決方法とそれを調べたツール (～さん、実際のおもちゃ、発達シートなど)
課題の振り返り・感想	・食べ物が小さい→誤飲の危険 ・パーツが取れるかも、誤飲 ・もっと体全体を使えるようにしたい。 ・手先の器用さをプラスしたい。
	・ボタンなどで固定して、ボタンの付け外しに挑戦→日常生活にも！ ・リズム感が出てくる→音が鳴るようにする。 ・見つけた食べ物の数を数える。→数字を知る ・お弁当箱に自分で詰めて、自分らしさを芽生えさせる→情緒！ ・色で分ける遊び方も→色を認知、仲間分け
	私は、交流や実物のおもちゃや本から、1つのおもちゃでも工夫次第でいろんな遊びができるとわかりました。成長してから楽しめるように、いろんな段階での遊び方を用意したいです。おもちゃではないものでも楽しめると知ったので、身近なものからおもちゃを作るのもいいなと思いました。丈夫に安全に楽しめるように、もっと補強もしたいと思いました。

【図2：様々な方法で検討した振り返り】

○ミニ先生の活躍

第2学年「防災バッグ製作」（R4）では、作業が早く正確に終了した生徒に、



「ミニ先生」として、教え合う活動を行った。【写真2】

【写真2：ミニ先生で教え合う様子】
被服室では、4人掛けの机に3人を上限に配置をし、机ごとで協力して進めてきたが欠席者や習得度の差があるなど、同じ機の生徒だけでは理解が深まらない課題が生じ、このシステムの導入に至った。勉学以外で活躍できる場にもなり、生徒が初めて作業する中で見つけたコツについて学び合うことができた。そして、教師はその間に個別で支援が必要な生徒に付いて指導することができる。「ミニ先生」という名札を掛けて巡回することで、質問したい生徒は気軽に教えてもらうことができ、教師も作業が終了した生徒や困っている生徒を把握することができた。

【研究内容 2】

「課題と実践」を通して課題解決能力の質を高めるための指導の工夫

(1) 家庭科の見方・考え方で思考するための提示や指導の工夫

提出された実践を各項目で評価分析を行い、生徒への指導や授業で補填すべき内容を精査した。

○「課題と実践」の評価・分析(R 3～)

各過程で3段階の評価を設定し、実践内容を学習指導要領の内容項目ごとに分類し、記録した。

【表2】は評価項目と記録の一部である。

【表2：課題と実践の過程の評価項目とその記録例】

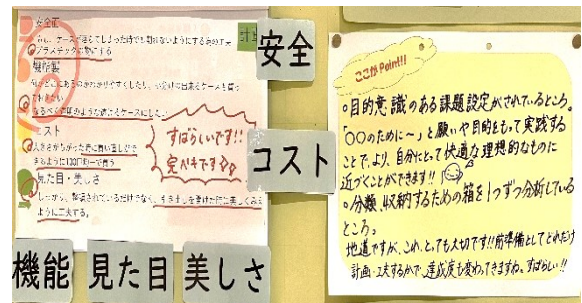
	◎	○	△
現状	困り感から分析	その場の思いつき	記載なし
課題	具体的(家庭科の見方・考え方【R4追加】)	意気込みのみ	
計画	具体的(家庭科の見方・考え方【R4追加】)	方法の情報のみ	
実践			
結果	課題に対する結果を記載結果を分析している	写真や結果を載せただけ	
評価	計画や結果の過程それぞれに評価	全体的に簡単に評価	
反省	計画や結果の過程それぞれに反省、解決策を検討	全体的に簡単に反省	
今後	反省からの次への具体的な展望、再実践あり	「また行いたい」など簡単な展望	

課題と実践 過程								内容概要	学習指導要領 内容項目				
現 状	課 題	計 画	実 践	結 果	評 価	反 省	今 後		A家族・ 家庭生活	B食 生活	B住 生活	C消費生 活・環境	
◎	◎	◎	◎	◎	◎	△	○	ボタン付け			B(4)	C(2)	
◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	夕食作り	A(1)(3)	B(3)			
◎	◎	◎	◎	◎	○	△	△	夕食作り	A(1)(3)	B(3)			
◎	△	◎	◎	◎	◎	○	○	スパイク洗い			B(4)		
◎	◎	◎	◎	◎	◎	△	○	調理	B(1)(2)(3)				
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	帽子帯付け			B(5)		
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△	エアコン掃除			B(4)		
◎	△	◎	◎	◎	◎	△	△	靴下シミ取り			B(4)		

分析した結果、視点をもって「計画」を立てた生徒はその後の過程(特に「評価」、「反省」、「今後」)も視点に沿って進めることができ、より具体的な課題解決に繋がっていた。また、初任研(R 3)の夏季研修では、生活の営みに係る見方・考え方(以下「家庭科の見方・考え方」)をもとに思考することの重要性を学び、授業や「課題と実践」の中で取り入れるよう、2年目(R 4)以降、意識的に次の2点を工夫した。

○「課題と実践」の評価の改善と提示の工夫

「課題と実践」の評価について、「課題」と「計画」で、家庭科の見方・考え方をを用いるよう、評価内容を追加した。同時に教師の手本も具体的に見方・考え方を押さえたものを新たに作成し、生徒に紹介した。生徒の「課題と実践」を掲示する際には、見方・考え方をを用いているところにプレートを貼り、視覚的にも分かりやすくした。【図3】また、見方・考え方をを用いていることを生徒自身が認識していない場合は、具体的に生徒が使用している見方・考え方を示すことで、実践した生徒や閲覧した生徒が次回に使用しやすいように工夫を行った。



【図3：見方・考え方をういた生徒の実践を可視化と共有したい内容の掲示】

○「家庭科の見方・考え方シート」の活用

学習指導要領に記載されている用語を抽出し、分かりやすい言葉に置き換えて、「協力・協働」、「健康・快適・安全」、「生活文化の継承・創造」、「持続可能な社会の構築」の4つの視点に分類しまとめた。これを「家庭科の見方・考え方シート」として、年度初めの授業で配付し、ファイルの内側に貼った。

【図4】また、黒板にも掲示し、題材に応じて、使用したい見方・考え方を紹介した。振り返りの記入では、例を紹介し、シートを何度も確認しながら考えることで、次第に見方・考え方をを用いて、思考する生徒が増えていった。

家庭科の見方・考え方

課題設定や計画の時に押さえてほしいポイント!!

協力・協働

- 役割分担
- 協力・協働
- マナー・家族
- 役割分担

健康・快適・安全

- 機能(合理的、効率的)
- 能率
- (手軽さ、手早さ、使いやすさ)
- おいしさ・健康
- 見た目(美しさ)
- 安らぎ・季節
- 衛生・安全・品質

生活文化の継承・創造

- 創造(新しく創り出す)
- 伝統(先人の知恵、各家庭の生活文化)

持続可能な社会の構築

- 環境・資源
- アフターサービス
- 持続可能・コスト

【図4：家庭科の見方・考え方シート】

【研究内容 2】

「課題と実践」を通して課題解決能力の質を高めるための指導の工夫

(2) 題材終盤で「課題と実践」を取り入れた授業の実施

(1)の記録から、実践内容について、令和4年1学期終了時点で次の割合(%)となった。

A家族・家庭生活	B食生活	B衣生活	B住生活	C消費生活・環境
14.3	48.2	28.6	7.1	1.8

「消費生活・環境」、「住生活」、「家族・家庭生活」について実践している生徒が少なかった。そこでこれらの題材終盤で、「課題と実践」を取り入れた。

○第1学年「快適な住生活をめざして」より(R4)

快適で安全な住空間や、家族構成により住空間が変化することを学習した住生活の題材の終末課題として、快適な住生活のためにできることを考えた。実施時期が12月であったため、「大掃除をしよう」と題して、1時間で自分の家庭の状況を分析し、計画まで立てた。家庭科の見方・考え方の中から、「役割分担」、「安全」、「コスト」、「機能」、「見た目」の具体例を挙げて説明した。生徒はそれぞれの家庭の現状を整理し、実践内容を考えた。

- ・自分の部屋の片付けの経験から、妹の部屋を協力してより快適に過ごせるようにしたい。
- ・卓球台周辺に物や汚れがあると怪我をしてしまうから、安全に練習できるように見直したい。

例示した見方・考え方をを用いて考える生徒が多くみられた。特に多くの生徒が家族と役割分担をして掃除をする計画を立てた。実は、全校生徒対象のアンケートの結果として、よく用いる見方・考え方は、「安全」が71%、「見た目」「おいしさ」が53%、と上位を占め、「協力・協働(役割分担)」は18%とあまり用いられていない実態があった。本授業は、住生活と家族・家庭生活の関連のある行事や慣習を取り上げた。またR4からは「おせち」を題材に食生活と家族・家庭生活を関連させる授業を行っており、その後の「課題と実践」で「祖母と共におせちを作った。」などと「協力」や「伝統」(アンケートでは11%)を用いて行う生徒が複数名みられた。このように分野を組み合わせ提示することは、見方・考え方を多角的に働かせるために有効であると分かった。

○第3学年「発達を促すおもちゃ製作」より(R5)

幼児の発達や関わり方の学習後、おもちゃ製作を行った。終盤課題として、おもちゃの現状を把握し、改良をする授業を行った。これまでの「課題と実践」の分析から、生徒は課題を立てることに難しさを感じていた。そこで、授業内で課題設定の場を設け、次の2つの課題の立て方(次の①、②)を提示し、生徒が選んで設定した。「作り手の願い」を加えることで、生活の目的意識を明確にすることができた。

①「発達」と「家庭科の見方・考え方」を入れる

例示：安全かつ社会性を発達させるおもちゃを作る改良方法を検討しよう。

生徒A：丈夫で認知の発達を促すおもちゃの改良を考えよう。

②①+「作り手の願い」を入れる

例示：かわいい見た目と言葉を発達させるおもちゃを作り、兄弟で楽しく遊べるように改良方法を検討しよう。

生徒B：安全に、身体の発達だけでなく認知の発達も促して、簡単に楽しめるものを考えよう。

課題設定の具体を提示することで、生徒は押さえる言葉や内容を絞って自分の現状を踏まえて設定することができた。その後の授業では、主体的に課題に沿って改良方法を検討することができた。しかし、課題設定の時間が足りず、全員が確実に設定することはできなかった。そこで、これらの課題設定を日々の授業の中で積極的に取り入れていく必要があると分かった。

授業実践後、「課題と実践」の実践内容について、令和5年2学期終了時点で次の割合(%)となった。

A家族・家庭生活	B食生活	B衣生活	B住生活	C消費生活・環境
16.0	45.0	19.0	14.0	6.0

「住生活」での大幅な改善がみられた。「家族・家庭生活」や「消費生活・環境」では、分野を複合して取り入れる生徒が多くみられた。また、家庭科の見方・考え方に沿って、計画を立てることができるようになってきた。

したがって、授業内で「課題と実践」を積極的に取り入れて、「課題」や「計画」の立て方以外にも全ての過程において具体的や指導をして、実践していくことがより高い資質・能力を育成することに有効であると考ええる。

6 成果と課題

【研究内容1】○成果 ●課題

- 「課題と実践」を生徒が円滑に進められるように、タブレット端末を活用して必要な情報や学習過程を共有することで、日常生活を通して主体的に学びを重ねることができた。
- 生徒のつまづきを事前に想定・把握することで、そのつまづきに対する支援を具体化することができるとともに、生徒自身も課題を自覚して学びに向かうことができた。
- 家庭学習については主体的な生徒のみが実践しており、全員の資質・能力を向上するには授業内での実践回数を増やしていく必要がある。
- 家庭科の全範囲の情報を共有はできておらず、準備や授業外の家庭学習を見届ける必要があるため、かなりの時間を要してしまう。

【研究内容2】○成果 ●課題

- 生活の営みに係る見方・考え方に関わる掲示物を作成したり、資料を配付したりすることで、生徒が自身の見方・考え方を自覚した上で学びに向かい、「課題と実践」の質を高めることができた。
- 題材終盤で「課題と実践」を取り入れた授業を実施することで、生徒はより多角的に見方・考え方を発揮することができ、そのことがより質の高い資質・能力を育成することにつながった。
- 家庭科に係る見方・考え方において、頻繁に用いるものと全く用いられないものがあり、提示の仕方もさらに改良していく必要がある。
- 今回、授業数の少ない3年生に事前アンケートを行い、個人への今後の手立てや助言を考えた。全ての題材で行うのは生徒の作業時間も減り、教師の負担も増えるため、実施する場面を精査していく必要がある。

としての力の向上があつて、実践をやって楽しかった。

- ・そもそも日常の困り感についてしっかり考えることがなかったため、普段の生活について見直すことができた。「課題と実践」を通して自分のできることが増えたり、家族に喜んでもらえたりしたことが嬉しかった。

授業実践や家庭学習の分析を通して、問題解決能力をする育成するためには、生徒が興味・関心をもって主体的に取り組むことが大切だと実感した。そのためには、生徒の実態をアンケートや授業の様子から把握し、「目の前の生徒に必要な力は何か。」「どこを重点的に押さえるか。」を考え、その上で、生徒が「楽しい」、「分かりやすい」と思える授業を考えていくことが非常に大切になることを学んだ。そして、課題解決能力の質を高めるために、日常生活で継続的に生かしていくことや、より様々な家庭科の見方・考え方で捉えていくことなどが新たな課題と分かった。「課題と実践」を常に教師も行い、より豊かな家庭科の授業を目指し、教師自身も専門知識を深め、楽しみながら生徒と関わっていくことを大切にしたいと感じた。

7 参考文献

文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）
解説 技術・家庭編」

7 おわりに

「課題と実践」を通じて、生徒から次の感想があった。

- ・実践を行う中で、計画を立てる力や、考える力の向上につながった。実践したからこそ、改善する所があり、それを改善するために行動に移す力が身に付いた。自分の生活の充実や、人間